『キリストの新しい戒め』ヨハネ13:31-35

13:31 さて、彼が出て行くと、イエスは言われた、「今や人の子は栄光を受けた。神もまた彼によって栄光をお受けになった。
13:32 彼によって栄光をお受けになったのなら、神ご自身も彼に栄光をお授けになるであろう。すぐにもお授けになるであろう。
13:33 子たちよ、わたしはまだしばらく、あなたがたと一緒にいる。あなたがたはわたしを捜すだろうが、すでにユダヤ人たちに言ったとおり、今あなたがたにも言う、『あなたがたはわたしの行く所に来ることはできない』。
13:34 わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える、互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。
13:35 互に愛し合うならば、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての者が認めるであろう」。

●序論
先週、メッセージの冒頭で、聖歌433「弟子となしたまえ」という賛美の歌詞を紹介しました。そこには「心の底から弟子となしたまえ」という願いが表現されている。4番には「ユダにはなるまじ』という歌詞がある。そこに闇を感じやすいわたしは、怖くてなかなか選曲できなかった…というようなお話もしました。
最終的な結論として、このユダに象徴されるような闇に関心を持つのではなくむしろ、光なるキリスト”に、もっと関心を持ち、目を向けましょう…とお話してきたのです。

そうして今日お読みしたところは、イスカリオテのユダが出ていったあと、残された弟子たちに向けて語りだされた言葉の最初です。

●本論
Ⅰ．栄光を受けられた
「栄光」という言葉についてのイメージは、そこに輝きがある、光がある、そこには勝利があり、すべての栄誉がある。…そういうイメージです。いわゆる闇と正反対の印象ですね。　ヨハネはこの福音書の最初の最初にこう記しています。
ヨハネ1:1-5(抜粋)
初めに言があった。…　この言に命があった。そしてこの命は人の光であった。 光はやみの中に輝いている。そして、やみはこれに勝たなかった。

「光が勝利する！」とわかる、つまりイエスさまが勝利する…という言葉です。
ただ実際に人々が目にした、イエスさまの最後は、裏切られて捕らえられ、裁きを受けて鞭打たれ、極悪人とともに十字架で殺されるありさまでした。
エルサレムの多くの人が目撃したその悲惨なイエスさまのお姿に、だれが、神の「栄光」を意識できたでしょうか。

しかしヨハネの福音書は、このイエスさまを「神の栄光」と結びつけて記しています。

ヨハネ1:14 そして言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまこととに満ちていた。

「その栄光を見た」とある。
それは単に、癒やしを行って、奇跡を行って、そのみわざと言葉で人々を魅了して、エルサレムで王として人々に迎えられた姿を指しているわけではありませんでした。
　イエスが受けられる、あの悲惨見えるあの十字架の出来事を通して成就された神の愛と救いの御業を、「神の栄光」と見ているのです。

13:31 さて、彼が出て行くと、イエスは言われた、「今や人の子は栄光を受けた。神もまた彼によって栄光をお受けになった。
13:32 彼によって栄光をお受けになったのなら、神ご自身も彼に栄光をお授けになるであろう。すぐにもお授けになるであろう。

つまり、罪なき神の独り子イエス様が、人のすべての罪の身代わりとしてとして十字架で裁かれて死なれること。そうして、すべての人の赦しを完成することで、栄光を受けられたのです。　それこそが、それが神さまのみ心であり、その愛の証だからでした。

「罪ある人のために、赦しの福音を完成する」。それを通して、子も父なる神様も、その愛のみ心のもとに、お互いにその栄光を”受ける”ということなのです。
　ヘブル2:9-10（LB）
…私たちのために死の苦しみを味わうことによって、栄光と誉れの冠を受けられたイエスを見ています。イエスは、神の大いなる恵みのゆえに全人類のために死なれたのです。

わたしたちは今日の礼拝の中で最初から、「主の栄光」をほめたたえて賛美しています。
わたしたちが目を向けているのは、闇を感じさせるようなこの世をも愛して命を捨ててくださり、闇を打ち破り、わたしを赦し救う福音を立ててくださった方なのです。

Ⅱ．新しい戒めを知る
13:34 わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える、互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。

「互いに愛し合いなさい」と言う言葉…　今の時代のわたしたちの目から見ても、その言葉は、非常に美しいチャレンジの言葉だな…と思う反面、聞き慣れ、聞き古された言葉だと思う人もいるかもしれません。

それを、「新しいいましめをあなたがたに与える」と言われ。どういう理由でしょうか。

ユダヤの人たちにとって「愛すること」は、がすでに教えられていることでした。
マタイ22:39　…『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。
それは律法、つまり民族的な戒めとして教えられてきたことでした。
一方で、現代のわたしたちは、それが善い生きざまであることは教えられてはいても、民族的な戒め、国の律法として教えられているものではありません。
そういう意味で新しい事柄、新しい戒めと言えるでしょう。

そして当時のユダヤ人たちにとっても、またわたしたちにとっても「新しい戒め』といえる内容について見るならば、2つ目。
「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。」とあるとおり、イエスさまがなさったように愛するということが迫られるのです。
その意味で、ユダヤ人たちにとってもわたしたちにとっても、新しいものです。
イエスさまは、弟子たちの前にひざまづき、当時の奴隷のように召使のように身を低くして、一人ひとりの足の汚れを洗い仕えて言われました。

> 13:14-15 …主であり、また教師であるわたしが、あなたがたの足を洗ったからには、あなたがたもまた、互に足を洗い合うべきである。 わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしは手本を示したのだ。

それは、あのイスカリオテのユダの足をも洗うほどであったことを知りました。
その姿は、まさに本物の献身です。その献身のありさまは、あの十字架でのキリストの姿に至るのです。　そのすべての姿を覆う言葉は、愛のほかにありません。

> 13:1 …イエスは、この世を去って父のみもとに行くべき自分の時がきたことを知り、世にいる自分の者たちを愛して、彼らを最後まで愛し通された。

自分が中心ではなく、弟子たちを、心から思い、愛された、その姿に、わたしたちは「わたしがあなたがたを愛したように」、という「新しい戒め」を見るのです。

Ⅲ．弟子となる
この13章に始まる数々の言葉と姿は、遺言メッセージとも言われることがあります。

以前に「塩狩峠」という映画にもなった小説を紹介しました。
その中に、主人公の長野信夫青年がまだ未信者だった頃、その父貞行がなくなり、その遺書が読み上げられるシーンがあります。そこにはこうありました。

> 「人間いつ死ぬものか自分の死期を予知することはできない。ここに改めて言い残すほどのことはわたしにはない。わたしの意志はすべて菊(妻)が承知している。日常の生活において、菊に言ったこと、信夫、待子に言ったこと、そして父がなしたこと、すべてこれ遺言と思ってもらいたい。　わたしは、そのようなつもりで生きてきたつもりである」。

このお父さんは、妻の菊さんの信仰に感銘を受けてイエス・キリストを信じ、キリスト者としてその晩年を過ごし、その信仰生活の姿をを遺言として残したのです。

イエスさまはこう言われました。
13:35 互に愛し合うならば、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての者が認めるであろう」。

なにかの成績を残す、メダルを取る、何かの作品を残す、そのことで人は、いわゆる一廉(ひとかど)の人として”認められる”のかもしれません。
でもクリスチャンは違います。「互いに愛し合う」ことでイエスさまの弟子であることが、周囲に認められ、知られるのです。
ただ、そのクリスチャンたちが一緒にいて、祈り会い、助け合い、み言葉で慰め合う姿を通して、イエス様は言われるのです。「あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての者（だれもが）が認めるであろう」と。

先週、そして今日の冒頭で取り上げたように、「心の底から、弟子となしたまえ」英語では「わたしは、本物のクリスチャンになりたい」という歩みは、この御言葉の応答にあるのだとわかります。
わたしたちの交わりの真ん中にはイエスさまが一緒にいてくださる、わかってくださっている…と知ると、少し気が楽になります。それが何よりうれしい！と、そしてそれは思うだけでなく、実際にイエスさまはそこに祝福をくださるのです。

●さいごに
皆さんにも祈っていただいていますが、昨日・今日と石川県奥能登の豪雨被災地で、今、関西地方からチームが送られてボランティア活動がなされています。
今、そこに遣わされているチームのためにお祈りください。ある意味ではいろいろな教会からの寄せ集めのチームです。けれどもまずこのチームの中に、イエス様が一緒にいてくださることが何よりもの祝福となり、証となるとわたしは信じて祈っています。　そこにキリストの新しい戒めが、命に満ちていきいきと動き出す姿を期待しています。

わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える、互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。互に愛し合うならば、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての者が認めるであろう。（:34-35）

ああ、この人たちの中に、神さまがいらっしゃる。キリストがいると…わかるように。そう、わたしたちにはキリストの思いが、キリストの心が必要です。わたしたちの教会に、わたしたちの交わりに、キリストの御霊の働きが必要なのです。そこにこそ、キリストの御業、キリストの臨在、キリストの栄光を見ることができると信じます。